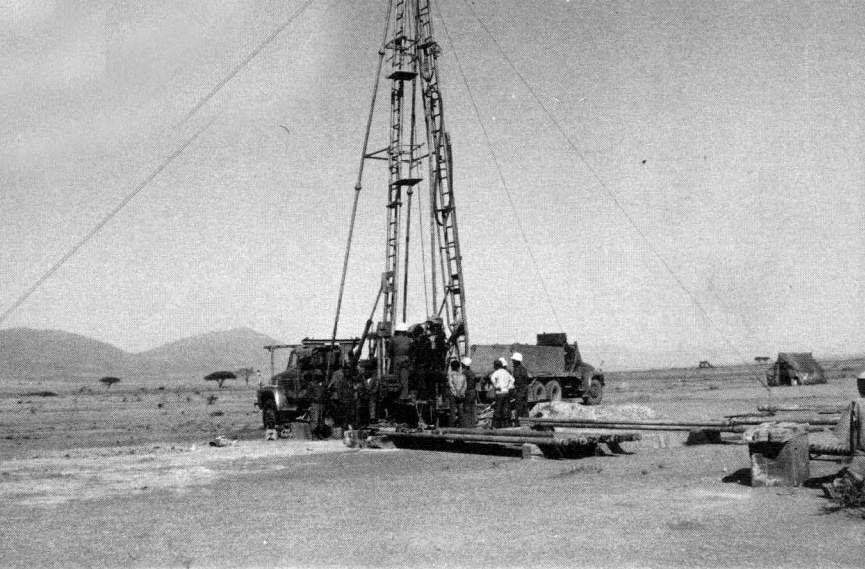


諸石和生

エチオピアで
井戸を掘る





エチオピア 井戸を掘

諸石和生

草思社

エチオピアで井戸を掘る

1991 ©Kazuo Moroishi



著者との申し合わせにより検印廃止

1991年10月7日 第1刷発行

著 者 諸石和生

装丁者 中島かほる

発行者 加瀬昌男

発行所 株式会社 草 思 社

〒 150 東京都渋谷区神宮前4-26-26

電 話 東京 03 (3470) 6565 振 替 東京 7-23552

印 刷 壮光舎印刷株式会社

カバー 株式会社 大竹美術

製 本 大口製本印刷株式会社

Printed in Japan

ISBN 4-7942-0433-7

生活が困難になったとき、どこか遠いところに行けば何とかなるのではと、淡い希望とも夢ともいえるようなものを抱くのは普通だろう。その遠いところが国内であろうと国外であろうと、もはや問題ではない。いや、遠ければ遠いほどいいに決まっている。行き場をなくした連中は、何処かに身を投げるしかあるまい。投げる先は、車が蟻の行列のように見える林立するビルの谷間か、谷底に尖った岩の見える橋の下か、電車が近づいてくるプラットホームか、それとも外人部隊か、相場はむかしからだいたい決まっている。

プラットホームに佇んで、忙しそうに、なにか特別な用件でもあるかのようにせかせかと動く人の流れに嫉妬しながら、走り去る電車を何台も見送っていた私の目に飛びこんできたのは、あいにく外人部隊ではなく海外協力隊の募集広告だった。

駅は出発の予感に満ちている。しかし公園には旅の終わりを予感させるものがある。出発は共同体の日常におさらばすることであって、なにも電車に飛びこむだけではあるまい。そう思いなおしてエチオピア行きの電車に飛び乗った私ではあったが、終着駅の駅前公園をうろうろしていた私は、さっそく職務質問を受けなければならなかった。しかも到着地の日常は露骨をきわめていた。しかしその

おかげで私は、すぐに多くの仲間を、権力と身分証明に怯えながら生活を探し求める貧しい人びとを見つけたことができた。

エチオピアの独裁政府は、秘密を楯に人びとの口を塞ごうとなりふり構わず刀を振り回していたが、そんな見え透いた権力にたじろいで共犯者に甘んじる者はもはやいなかった。教会や伝統の生活共同体の、信仰や権威に寄り添えなくなった人びとの心を占領しようとなりふり構わぬ国家を尻目に、人びとは小さな秘密を、小さな物語を、自分だけの物語を物語りはじめた。

私は、一九八二年から八六年までの四年間をエチオピアで過ごした。初めの三年は、国家水資源委員会の地下水開発公社で、主に地方都市での地下水開発事業に携わり、あとの一年は、難民救済復興委員会の技術サービス部に所属して、旱魃被災地や被災民移住地で地下水開発を行った。

もとより取材を目的とした旅でもなく、一年の大半を出張先の井戸掘り現場で生活した私に、報告するような特別なことはない。思い出すのにも骨の折れる退屈でつまらない苦労ばかりの日々や、思い出したくもない旱魃被災民の悲惨な姿、子を亡くした母親の顔ににじむ哀しみ、そんなものを、いまさらほじくり返してみても仕方あるまい。

でも、私は書いた。書いたのは倫理的な理由からではないような気がする。エチオピアのことを少しでも理解してもらうことで、悲惨な状況にある旱魃被災民の一人でも多くが救われるのならと、願ったからではないような気がする。われわれと同じ時代に生きる同じ人間が、一方は健康そうに膨れ上がり、一方は枯れ枝のように痩せ細った姿を晒さねばならない不公平や矛盾を伝えたかったからで

はないような気がする。

多分、時代のせいだと思う。アジスアベバの寂しい街角の、蠟燭に揺らめくブンナベットのほの暗い部屋で、女たちがつまらない身の上話を、自分がなに者であるかを、語りつづけねばならなかったように、私もまた、物語りつづけるよりなさそうなのだ。職務質問の答えを探して。

一九九一年夏

著者

エチオピアで井戸を掘る 目次

まえがき

序 章 雷 雨 13

第一章 ロバと自動車 23

初夜のインジェラ 23

シュロとクツウフォ 29

ロバと自動車 33

薪と炭 35

共通語と公用語 40

第二章 駐在事務所の人びと 44

ゲタツチヨ先生 44

ティグレ人・カサエ 47

オロモ族・ヨハンネス	50
ブンナベットの女たちは……	53

第三章 首都の暮らし……………56

広くて窮屈な屋敷	56
アラミツウ、嘆きのコーヒー	59
カバレという「自治組織」	69
ザバニアの日々	72
沈黙の老女	77
糞まみれの下半身	80

第四章 リフトバレー地溝帯……………83

エチオピア時間	83
工場ベルト	88
ナザレット、無防備に横たわる美しい女性のような街	92

アフール低地のアワツシュ川 99

アバイ川またはブルーナイル 108

ガワネ、裸の肩を思いきり抱いてみたかった 111

地雷または糞もできない荒野のこと 116

アフール族もしくは砂漠の都会人 120

検問 128

第五章 アッサブ 131

地下水開発公社と一等書記官 131

井戸フィールド、アルシーレ砂漠 136

ブラハーノ君の戦車 140

砂漠の地下水 143

一滴の水も出ない 147

ミスター・リポン 151

港町アッサブはどこもここも小便臭かった 160

断食なんて糞くらえ 167

優しい娘イエシー 170

アミーバ赤痢とマラリア

172

エリート役人キダネ君来る

179

第六章 首都アジスアベバ

186

水事情

186

地下水汚染または小便臭いビールのこと

189

地下水探査

194

私は自信をなくしかけていた

199

噴出する地下水

202

第七章 飢えの街道

211

ムセ君の涙

211

コンボルチャ

216

消えた飢餓避難民の群れ

227

曳かれ者の小唄

233

第八章 飢餓に群がるもの……………237

集団移住 237

自分だけの物語、そして路地裏の早魃 242

早魃視察団 245

ジャーナリスト 248

画面の中の飢餓、またはサクラに乗っ取られる現実 256

政府派遣救急医療調査団 260

難民救済復興委員会 264

再び、一等書記官 274

難民移住地アソサ 281

ガンベラのビール事情など知ったことではない 285

奇妙な光景 292

付録 297

エチオピアで井戸を掘る

序章 雷雨

すでに夜の十時をまわっている。

夕刻に襲った雹まじりの雷雨のなごり雨が庭のブーゲンビリアを音もなく濡らしている。

冷たい暗闇。闇というよりは、墨のような黒い物質。触ることもでき、窓を開けたら、部屋に侵入してきそうな空恐ろしい物体。南の地平線あたりで闇の一部が裂け、稲光が走る。雷鳴は低く、遠い。六〇ワットの裸電球に赤く照らされた八畳くらいの部屋には、日本から送ったときのまま、無造作に積み重ねた段ボール箱と机の上に数冊の文庫本があるのみ。段ボールには夏用の衣類しか入っていない。摂氏一〇度のがらんとした部屋、起きていても寒いし、でもベッドにもぐりこむにはまだ早い。ベッドの毛布をひっぱがし、体に巻きつける。毛布を巻いた私は、夕暮れの街でよく見かけるガビをまとったエチオピア人の格好となる。

ガビ——エチオピア人の誰もが持つっている一枚の布。ガビは、幅も長さも三メートル以上あるガーゼの綿布で、普通は二重に折りたたんで使う。ガビのガーゼ綿布は、細い経糸と、太くていびつなままの粗い緯糸で織つてある。緯糸は母や妻、恋人が綿から撚りだし、それを機織り職人のところで仕上げてもらうことが多い。息子や夫、恋人たちの無事を祈る女たちの想いが織りこまれている。

女ともだちからガビのプレゼントを受け取る時には覚悟がいると聞く。町に住む人びとは寒さと寂しさから、原野に暮らす人びとは朝夕の寒さばかりでなく、日中の強い紫外線から身を守るために、

この一枚の布を肩から全身、ときには頭からすっぽりとくるみこむように使う。あるときには頭にのせ、そしてあるときには腰に巻きつけ、エチオピア人はこの一枚の白い布をいつも体にまとわりつかせている。井戸掘りに従事する私の仲間たちも、出張のときには必ずこのガビを携行し、この布にくるまって眠る。汚れたシーツや、薄く毛の抜けてしまった毛布の代わりにもなるし、蚤や南京虫の執拗な攻撃をかなり防ぐことができるという。

こおろぎがギイギイギイと啼いている。蛙がグエグエグエと騒いでいる。ハイエナの尻切れトンボのような吠え声がときおり混じる。犬の遠吠えが響きわたる。

犬の遠吠えをひそかに追っていくと遠い過去の記憶、幼いころの故郷での暮らしに重なりあう。側で父母が寝ているのに、犬の遠吠えにひきずりこまれ、独り眠りにおちるときの寂しさ。その故郷を離れ久しい時が過ぎてしまった。時のまにまに漂い、いつしかエチオピアに流れつき、久しぶりで手紙を書くとう机に向かっても、頭は空っぽになり、言葉が浮かばない。

エチオピア——昭和五十七年に赴任したあのときも雨季の始まりだった。北緯三度から一八度のあいだにあるこの国は、アフリカといっても北半球に位置している。ここでは、太陽が北半球にある四月から九月に雨が降り、南半球にある十月から三月までは乾季となる。

南東部を除く大部分の地域で七月から九月の三カ月に雨が集中する。クレムツと呼ばれる雨季である。エチオピアの冬でもある。必ず訪れる昼すぎの雷雨。雷雲はアジスアベバの北と西を遮る山並みを越えて、あとからあとから街に攻めこんでくる。厚い雲に覆われ不気味な暗さに静まり返った街を稲妻が裂く。大粒の雨と氷が飛礫のように街を打ちつける。

トタン屋根の街は大音響をたてて、雷鳴に共震する。雨は一瞬のあいだに静寂を狂躁に変える。狂